



記 入 日 年 月 日

1. 概 要

実践団体名	静岡大学藤井基貴研究室		
連絡先	研究室：054-238-4696 携帯：090-4251-6481		
プランタイトル	教職を目指す大学生がチャレンジする新たな防災教育		
プランの対象者※1	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 14,	対象とする 災害種別※2	1, 2, 3, 4

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

【目的】 幼児、児童生徒、大学生、地域住民を対象として、防災知識および災害時の「判断力」、
「行動力」を育てるための教材および授業を開発し、実践・普及する。

【ポイント】

- ・魅力ある防災教材・授業の開発（感情・道徳面からのアプローチ・災害時要援護者向けの教材）
- ・多様な指導法とカリキュラムの提案（家庭、学校、地域における実践、教科横断的取り組み）
- ・防災教育を推進する教員の養成（教員養成課程の学生と共につくる実践）

【プランの概要】

教育学部で学校教師を目指す学生たちが家庭、地域、学校で活用できる防災教育の教材・授業開発を進めています。本プランでは地域社会や専門機関と連携を図りながら、下記のようなトータルかつインクルーシブな防災教育を追求しています。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ①防災紙芝居「みずがくるぞ!!!」の実践・普及 | ☞ 幼稚園・保育園・特別支援学校・児童館 |
| ②学校・大学における防災授業の実践・改善 | ☞ 「防災道徳」授業、留学生への防災教育 |
| ③地域社会・高齢者への防災教育の実践 | ☞ 参加型防災教育、防災ブースの出展 |
| ④防災教育に関する勉強会・研究会の開催 | ☞ 他大学との合同ゼミや合宿の開催 |

【期待される効果・ここがおすすめ！】

- ①学校教育・家庭教育・社会教育をフィールドとしたトータルな防災教育を展開。
- ②災害時要援護者を対象とする防災教育を実施し、インクルーシブな実践を追求。
- ③教員を目指す学生たちが主体的に活動に取り組むことで、防災への意識・専門性の向上を推進。未来の学校防災を支える教員の育成。



2. プランの年間活動記録 (2014 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	留学生への防災授業デザイン	留学生への防災授業の開発	・ 東京：Wanavi Japan 実践見学・連携 ・ 静岡大学：「防災道德」授業実践
5 月	年間活動計画の見直し		・ 藤枝市：教材提供「藤枝中学校」実践 ※静岡大学：教育実習期間
6 月	保育園・幼稚園との連携、フィードバック		・ 菊川市：「堀之内幼稚園」・「愛育保育園」 防災紙芝居の提供・実践 ・ 静岡大学：留学生への防災講座①
7 月	防災ブース・コンセプトデザイン	参加型防災ブースの企画立案	・ 静岡大学：留学生への防災講座② ・ 静岡大学：留学生への防災講座③ ・ 静岡大学：学内研究会の開催①（ゲスト： 地理学、比較文化研究の専門家）
8 月	下半期の活動計画 チーム編成		・ 静岡大学：学内研究会の開催②（ゲスト： 気象予報士、保育士、特別支援学校教諭）
9 月	防災道德のテーマ設定	「防災道德」授業の開発	・ 神戸市：防災ゼミ合同合宿（四大学） ・ 静岡市：「大浜ビーチフェスタ」ブース出展
10 月			・ 東京：チャレンジプラン中間報告会
11 月	防災道德に関する 巡検企画・実施		・ 静岡市：「ちびっ子寺子屋」ブース出展 ・ 富士宮市：A.C.C. 国際交流学園授業実践 ・ 気仙沼・亘理町・山元町：巡検
12 月	防災道德に関する 校区の巡検		・ 静岡市：大里東小学校での授業実践 ・ 名古屋市：名古屋大学での授業実践 ・ 山梨：教材提供「若草南小」の実践見学
1 月	留学生への防災教育カリキュラム・デザイン	防災教育カリキュラムの開発・検討	・ 静岡大学：静岡県危機管理部、多文化共生課、教育委員会との連絡会開催 ・ 静岡市：長田南小での授業実践 ・ 静岡大学：学内研究会の開催③（ゲスト： 防災専門家・報道関係者）
2 月	学校教育における 防災クロスカリキュラムの設計		・ 静岡市：「ふじのくに NPO」防災講座担当 ・ 静岡市：「ちびっ子寺子屋」ブース出展 ・ 国立市：「留学生教育学会」での発表 （大学院生による研究報告）
3 月			・ 教材・授業案 Website の公開



3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：①_____】※3

タイトル	防災紙芝居「みずがくるぞ!!!」の実践・普及
実施月日（曜日）	4月～
実施場所	堀之内幼稚園、愛育保育園、可茂特別支援学校ほか多数
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：加藤佑理・大森拓未 所属・役職等：静岡大学・学生
所要時間または 「コマ数×単位時間」	1回：30分程度
プログラムの カテゴリ、形式※4	11、14
活動目的※5	1、6
達成目標	紙芝居を日常の活動に取り入れ、他の防災活動と連携させる
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・紙芝居の読み聞かせ（朝の会等） ・避難行動の練習 ・他授業での活動との連携（共同開発したDVD教材を活用）
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・紙芝居 ・共同開発したDVD教材 ・読み聞かせ担当者（多くは担任）
参加人数	・のべ780人程度（推定）
経費の総額・内訳概要	・4000円程度（学生の交通費）
成果と課題	【成果】 ・脅かさない防災教育の普及 ・防災学習の日常化の推進 【課題】 ・紙芝居の構図の改善
成果物	・Websiteにて紙芝居データの公開

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



【実践プログラム番号：②】※3

タイトル	地域のお祭りにおける体験型防災学習ブースの出展
実施月日（曜日）	9月、11月、2月、
実施場所	静岡市：大浜ビーチフェスタ、ちびっこ寺子屋
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：大森拓未 所属・役職等：静岡大学・学生
所要時間または 「コマ数×単位時間」	6時間×3日間
プログラムの カテゴリ、形式※4	1, 13
活動目的※5	1, 8
達成目標	就学前の子どもたちに親子で防災について考える機会を提供
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・地域のお祭りに体験型防災学習ブースを出展 ・ブースを体験してもらいながら、基礎的な知識等を提供
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・段ボール、折り紙、竹竿、クリップ、パネル、模造紙、マジック、ガムテープ、テント借り入れ等
参加人数	・のべ350人程度
経費の総額・内訳概要	・およそ25,000円
成果と課題	【成果】 ・親子で楽しめる防災ブースをデザインし、実現できた ・多くの来場者があり防災バックへの意識が高まった 【課題】 ・体験と学習の接続
成果物	・防災ブースの素材

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。


【実践プログラム番号：③】 ※3

タイトル	命を考える防災教室：「防災道德」授業の開発・実践
実施月日（曜日）	4 月、12 月、1 月
実施場所	静岡市：大里東小学校、長田南小学校、静岡大学
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：仁科羽純、松井未夜子、堀江愛美、志村卓史 所属・役職等：静岡大学・学生
所要時間または 「コマ数×単位時間」	1 コマ×3 時間
プログラムの カテゴリ、形式※4	11
活動目的※5	5, 6, 8, 9
達成目標	完成度の高い授業が開発され、県内外にも授業案を提供できた
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・災害時の葛藤に関する情報収集・分析 ・東北地方での巡検：学校でのインタビュー調査 ・学内での模擬授業の実施 ・学校での公開授業の実施 ・教材・授業案の公開
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・授業者 ・プロジェクター、パソコン、スクリーン、ペープサート
参加人数	・110 名
経費の総額・内訳概要	・75,000 円程度（東北巡検の交通費、教材作成費）
成果と課題	【成果】 ・感情面や道德面からアプローチする防災授業の提案 ・児童及び家庭の防災意識の向上 【課題】 ・学生の授業力の向上
成果物	・授業用の PPT スライド

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。


【実践プログラム番号：④】 ※3

タイトル	留学生・外国人を対象とした防災教育の授業開発と実践
実施月日（曜日）	6月、7月、11月、2月
実施場所	静岡大学、名古屋大学、ACC国際交流学園、ふじのくにNPO
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：紫藤真由、仁科羽純、松井未夜子、堀江愛美 所属・役職等：静岡大学・学生
所要時間または 「コマ数×単位時間」	4コマ×90分
プログラムの カテゴリ、形式※4	11
活動目的※5	5, 6, 8, 9
達成目標	留学生・外国人を対象とした防災教材の開発・普及
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・留学生へのアンケートの実施 ・先行実践の視察・連携（Wanavi Japan） ・教材・授業の開発（英語版とやさしい日本語版）、模擬授業 ・学校・大学での実践 ・教材・授業案の公開
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・授業者 ・プロジェクター、パソコン、スクリーン、付箋、配布教材
参加人数	・のべ100名
経費の総額・内訳概要	・20,000円程度（教材作成費）
成果と課題	【成果】 ・留学生や外国人向けの教材・授業案の完成・提案 ・授業シナリオの台本化（英語・やさしい日本語） 【課題】 ・より総合的なカリキュラムの開発
成果物	・授業用PPTスライド

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：⑤】※3

タイトル	高齢者に対する防災講座の開催・担当
実施月日（曜日）	3 月
実施場所	岐阜県：美濃加茂市社会福祉協議会
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：秋山真穂 所属・役職等：静岡大学・学生
所要時間または 「コマ数×単位時間」	1 コマ×120 分
プログラムの カテゴリ、形式※4	11
活動目的※5	5, 6, 8, 9
達成目標	高齢者の持つ地域の防災知識の共有・防災意識の向上
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・担当者との打ち合わせ ・地域の防災史に関する調査 ・授業の開発 ・実践
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・授業者 ・スクリーン、パソコン、プロジェクター、意思表示札
参加人数	・約 30 名
経費の総額・内訳概要	・2000 円程度（意思表示札の作成）
成果と課題	【成果】 ・高齢者の防災意識を知ることが出来た ・家庭、地域、学校が連携した防災コミュニティづくりへの構想 【課題】 ・地域のなかで継続的に防災意識を高める仕組みづくり
成果物	・特になし

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：⑥】※3

タイトル	防災教育研究会の開催
実施月日（曜日）	7 月、8 月、1 月
実施場所	静岡大学
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：藤井基貴 所属・役職等：静岡大学・准教授
所要時間または 「コマ数×単位時間」	3 コマ×90 分
プログラムの カテゴリ、形式※4	1
活動目的※5	6、8
達成目標	防災に関わる専門家を招き防災意識の向上を図る
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	・地元で活躍する専門家への連絡 研究会へのゲスト依頼 ・研究会の開催 ・ふりかえり
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・プロジェクター、パソコン、スクリーン
参加人数	・およそ 80 名
経費の総額・内訳概要	・0 円（専門家の有志によるボランティアのため）
成果と課題	【成果】 ・学生や市民向けて公開された防災教育研究会を開催 ・多くの参加者があり、意識が高まるとともに連携が強化された 【課題】 ・事前に読書課題を課すなどして、理解が深まる工夫をする
成果物	特になし

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



4. 苦勞した点・工夫した点

プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点	・ほとんどのプランをおおむね予定通り進めることが出来た。 ・学生たちが教育実習や長期休暇等で不在になると取り組みが進められず、日程調整が最大の課題であった。 ・各プランをチーム編成にしたことによって、それぞれのチームで自発的に活動が進められ、またそのことによって相互に刺激しあえるよい関係が生まれたと思う。
準備活動で 苦勞した点 工夫した点	・上記と同様で学生たちが長期不在になる期間をどのようにカバーするかが課題であった。 ・遠方の実家に帰省する学生もいるため、ドロップボックス、SNS等を活用して作成したデータやファイルを共有し、お互いの進捗状況の確認につとめた。 ・また、定期的に勉強会等を開催したり、交流会に参加することで一年間を通して、活動への高い意欲が継続されたと思う。
実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点	・授業をさせていただく学校との意見のすりあわせで苦勞があった。 ・具体的には、防災教育において知識の伝達を重視してきた学校においては、災害時の葛藤を疑似体験させる「防災道徳」授業の意義が伝わりづらかったようである。とりわけ、自然災害のリスクが高い学校ほど思考力や判断力よりも「正解」を伝えようとする傾向があるように見受けられた。このことは学校教育でいえば、防災管理と防災教育の意味付けやバランスの問題であり、アプローチとしては専門知による知識伝達型の防災教育と対話を重視するリスク・コミュニケーション型の防災教育の両輪をどのようにまわしていくかという、現代の防災教育の課題でもあると感じられた。 ・防災の意識を高めてもらうために、授業では感情面へのアプローチを重視し、自分のこととして防災をとらえてもらえるよう工夫した。そのことによって児童たちは授業後にハザードマップを持って主体的に校区を歩き回ってみたり、親との話し合いを意欲的に重ねてくれたようである。学校や保護者からは感謝の言葉をいただいた。



5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	名古屋大学国際教育交流センター 静岡県富士宮市：A. C. C. 国際交流学園 藤枝市：藤枝中学校 山梨県：若草南小学校 静岡市：大里東小学校 静岡市：長田南小学校 静岡県菊川市：堀之内幼稚園 静岡県菊川市：愛育保育園 石川県：小木小学校 ほか	授業実践校及び教材提供校
保護者・ P T A の組織	静岡市：大里東小学校 P T A	授業実践に伴う家庭学習及び児童とのフィードバックへの協力
地域組織	岐阜県美濃加茂市：社会福祉協議会 静岡市：大浜ビーチフェスタ実行委員会	高齢者向け防災講座を研究室の学生が担当 親子を対象とした防災ブースの出展
国・地方公共団体・ 公共施設	静岡県：危機管理部 静岡県：教育委員会 静岡県：多文化共生課	意見・情報交換連絡会の発足（2015 年 1 月 14 日）
企業・ 産業関連の組合等	NHK 静岡だいいちテレビ 朝日新聞 毎日新聞 静岡新聞 番組制作会社テムジン	長時間にわたる取材のなかで、それぞれの防災担当者から多くの有益な知見や情報を提供いただいた。
ボランティア団体・ N P O 法人・N G O 等	ふじのくに N P O	外国人への防災教育講座を共催（2015 年 2 月 3 日実施）
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	静岡大学防災総合センター 京都大学防災研究所 留学生教育学会（2015 年 2 月） 中部教育学会（2014 年 6 月） 静岡哲学会	専門的知識の提供及び活動成果の報告



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として 得たこと	・本プランにおいては、災害時要援護者に重点をおきながら、家庭、地域、学校を対象とし、かつ幼児から高齢者・外国人留学生までを含めた、トータルかつインクルーシブな実践を追求してきた。その成果として、1) 防災紙芝居「みずがくるぞ!!!」は県内外の多くの教育機関で利用されることとなり、また併せてDVD教材「いのちをまもるリズムランニング」の普及も図られた。2) 次に外国人留学性向けの防災教材の開発を進め、こちらもやさしい日本語版と英語版が完成し、実践でも好評を博すと共に、他大学でも利用がすすめられている。加えて、小・中学校向けに開発した「防災道徳」の取り組みはチャレンジプランでの報告や新聞・テレビ等の報道を通して広く知られるところとなり、実際に県内外の学校で導入が図られている。また、地域のお祭りでの防災ブースも当初予定1回であったが、他のお祭りからも出展依頼があり合計3回を提供し、多くの来場をいただいた。これらの活動を通して、学生たちも見違えるように逞しくなり、また地域の大人や専門家との交流を通して、教師としての専門性を一段と向上させている。このような素晴らしい1年の機会と支援をいただいたことに深く感謝したい。
全体の反省・ 感想・課題	・上記のとおり、活動はおおむね順調に進み、多くの成果をあげることができた。課題としてはいかに活動のすそ野を広げていくかであろう。8名ほどの学生と取り組んだ活動であったため、学生たちも各担当プランの実行のために非常に多忙な時期があった。また就職活動や長期休暇の間はなかなか各自の日程調整が難しく、学生たちの献身的な努力に支えられた一年間であった。本活動を通して、学内および学外の多くの学生たちも防災教育に関心を寄せてくれるようになり、新たな学生ネットワークが生まれつつある。今後はそうした学生たちの活躍の場を拓きながら、より多様で継続力のある取り組みへとつなげていきたいと考えている。また、教材や授業案の公開にあたっては技術的な問題と著作権や肖像権上の問題で課題があり、これらについても専門家からの助言をうけながら、今後よりよい在り方を検討していきたい。
今後の 継続予定	・引き続き、災害時要援護者に重点を置きつつ、トータルかつインクルーシブな防災教育の実践を追求していく予定である。 ・当面の課題としては今年度開発した教材・授業案の円滑な公開・共有の加速である。 ・また、これまでの活動を通して、基本理念の検討、教材および授業案の開発は相当程度の進捗をみた。今後はこれらを総合するためにカリキュラムの開発、さらには評価方法の検討が課題となる。これらについてはすでに関連の専門機関や専門家とも連携を始めているが、国内外によき先行モデルを求めながら、継続的に活動を推進していきたいと考えている。 ・また、本報告会・交流会等で御縁のあった学校や機関とも交流を続け、実際に活動の様子を見学させていただく機会をもてればと思う。



7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

※補足資料【藤井研究室の活動の全体像】

他大学と
防災教育の勉強会・研究会の開催
●教科横断型の防災教育を推進
（＝カリキュラム開発）
●他大学・他大学との合同検討会
（例：名古屋大、専大ほか）
●専門研究機関との連携
（静岡県防災総合センター）
●「防災教育チャレンジプラン」
（実践団体として参加・交流）

合同研究会
静岡大学・
京都大学・
名古屋大学・
東海大学
●専門家による講義
●学生によるグループワーク・発表

地域で
参加型防災教育、防災ブースの出展
●静岡県：地域の防災力向上のための防災企画
●岐阜県：社会福祉協議会での企画

学校教育
「防災紙芝居」
「みずがくるぞ!!!」の実践・普及
対象：幼稚園・保育園・小学校低学年・特別支援学校・児童館
特徴：
●災害時の行動を虫で表現
●自然との共生の視点
●「育さない防災教育」
●避難行動・避難訓練との連動

家庭教育
「防災紙芝居」
「みずがくるぞ!!!」の実践・普及
対象：幼稚園・保育園・小学校低学年・特別支援学校・児童館
特徴：
●災害時の行動を虫で表現
●自然との共生の視点
●「育さない防災教育」
●避難行動・避難訓練との連動

社会教育
「防災紙芝居」
「みずがくるぞ!!!」の実践・普及
対象：幼稚園・保育園・小学校低学年・特別支援学校・児童館
特徴：
●災害時の行動を虫で表現
●自然との共生の視点
●「育さない防災教育」
●避難行動・避難訓練との連動

藤井ゼミのぼうさい
教職を目指す学生が
取り組む新たな防災教育

ねらい
●魅力ある防災教材・授業の開発
●多様な指導法とカリキュラムの提案
●防災教育を推進する教員の養成
トータルかつインクルーシブな実践を追求

防災教育のカリキュラム・デザイン

各教科	道徳	特別活動	総合的な学習の時間
防災教育			

留学生への防災教育

日本での地震への不安

Yes	No	その他
68%	28%	4%

自国での地震経験

経験あり	経験なし
68%	32%

自国での地震防災教育の実施状況

実施あり	実施なし
68%	32%

「防災道徳」
学校・大学における防災授業の実践・改善
「防災道徳」授業、留学生への防災教育
学校での防災授業の実践

教材の開発
Quick Op
●非常時のシミュレーション
●災害時の行動を虫で表現
●自然との共生の視点
●「育さない防災教育」
●避難行動・避難訓練との連動

ご案内
●NHK EBS 1
1/21 (土) 14:00～14:28
●NHK World
世界140の国や地域で
放送 1/19 (月) から

今後の取組
●災害時要援護者に対する防災教育
●道徳・感情面からアプローチする防災教育
●共同研究・教材開発・公開の促進
トータルかつインクルーシブな実践を追求

Footwork & Network Challenge Response & Responsibility
静岡大学教育学部 藤井基貴研究室

(自由記述: 1/3)

【防災教育の実践で得られた知見・防災教育の普及に関わる提案】

1年間の活動についての「ふりかえり会」を2015年1月14日（水）に研究室の学生たちと行った。その際にあがった意見やブレイン・ストーミングを通して確認された知見を以下6点に絞ってまとめ、本活動の提案としたい。

①考える防災教育

2012年7月に出された「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」最終報告では、「現在の学校教育においては、防災を含めた安全教育の時間数は限られており、主体的に行動する態度の育成には不十分であり、各学校において、関連する教科等での指導の時間が確保できるよう検討する必要がある」として、防災に関する知識や災害時にとるべき行動について一方的に伝達するだけでなく、児童生徒が主体的に判断・行動するための防災・安全教育プログラムの開発が求められている。これまでの日本の防災教育においては防災科学としての「正解」を伝達するというアプローチが主流をしめてきた一方で、今後は自然災害をめぐる人間科学としての「答えのない問題」も扱い、これについて意見交換を行うことで、事前の備え、災害時の判断や行動、それに向けた合意形成の力量・資質を向上させていく必要がある。こうした、いわゆる「考える防災教育」のアプローチを一定程度取り入れていくことは、防災管理上の「正解」を伝達する教育活動においても重要な準備学習となる。

②多様な防災教育

防災教育といえば、かつては避難訓練や防災講話を連想するのみであったが、近年では阪神大震災をきっかけとして開発された「クロスロード」、他にも「災害図上訓練 DIG」、「避難所 HUG」、「ぼうさいダック」といった多様な防災教材が利用されている。これらの教材は、災害時における複雑かつ多義的な状況を擬似体験させ、よりよい判断力や行動力を育てることをねらいとしている。加えて、参加型の学習スタイルを取り入れることによって、行政や災害の専門家に依存した防災管理体制および防災教育の在り方に再考を促し、行政・専門家・市民の一体化を目指す取り組みとしても注目を集めてきた。学校教育においても各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を通して、特定の時間枠にとらわれない、さまざまな防災教育へのアプローチが試みられている。今後もこうした取り組みを加速させ、日常の教育課程のなかに無理せず防災学習が取り入れられる授業及びカリキュラムづくりを追求していきたい。これにより防災への多様なアプローチが広がり、防災意識の日常化が促進されると考えている。

③持続可能な防災教育

東日本大震災以降、学校教育は防災の要として重要性を増し続けている。その一方で時間が経てば経つほど、人間の意識が薄れていくことは免れえない。多忙化する学校教育のなかで「防災教育」のために特別の時間を設け続けることは、次第に難しくなっていくだろう。だからこそ、新たな活動としてではなく、既存の教育活動のなかに防災を学習テーマとして取り入れ、持続可能な取り組みとして定着させる工夫が必要である。そのためには現状の各学校の教育課

(自由記述: 2/3)

程において防災と関連づけることが可能な教育内容を見直し、それらの接続や連携を意図的・計画的に高める「防災クロスカリキュラム」を各地域で作成していくことが有効であると考えている。すでに東北の各地で、その試みは推進されており、他の地域もそれら先行モデルから多くのことを学ぶことができると思う。

④リスク教育としての防災教育

学校において防災教育はいわゆる「安全教育」の範疇で語られることが多かった。しかしながら、災害時において直面する葛藤問題は、いわゆる「リスク」の問題である。危険を除き、安全を奨励するだけではなく、人間のさまざまな感情・心理に根ざした「リスクを扱う教育」として防災教育の取り組みはより一層奨励されてよい。防災研究の領域には近年、地震学者、地質学者、地理学者、工学者に加えて、心理学者、教育学者、社会学者も参入している。こうした学際的な研究の促進と実践現場との往還を通して、精度の高い防災教育のコンテンツを国内外に発信していくことが日本の国際的役割であり、課題であると考えている。

⑤ナショナル・スタンダードとしての防災教育

防災教育は各地域の特性にあったローカル・オプティマムとしてだけでなく、どの地域に移り住んだとしても持つべき基礎知識として、すなわちナショナル・スタンダードとして構想されなければならない。例えば、静岡では地震・津波防災への関心が高いが、大学進学等で他県に移動した場合、台風や水害のリスクに備える必要性に直面するかもしれない。移り住んだ先のハザードマップをいち早く入手し、土地の特性やリスクをふまえた上で、生活できるようになることが望まれる。そのような準備教育を学校段階で推進する必要がある。このことは他県の実践団体との交流のなかで自然災害の対象や意識にかなり違いがあることから気付くことができた。

⑥感情面からアプローチする防災教育 ―防災文化の継承―

日本の防災文化は、倒壊しにくいビルを建てたり、壊れにくい橋をつくったりといったハードウェアの部分で飛躍的な成長をとげてきた。その一方で、防災文化のなかには各時々の災害に直面した人々の感情や思いといった無形物の伝承も含まれる。そういった無形の文化をどのように引き継いでいくかというところに、現在の防災教育のもう一つの課題があると考えている。災害時はこう判断し、行動しなければならないという合理的部分と、人間の感情としてこうなってしまう可能性があるという感性的側面とがせめぎ合う。私たちは活動を通して、そうした災害時の葛藤に焦点をあて、その授業化を試みてきた。人間は感情的な生き物であり、だからこそ感情面に働きかけることが防災意識や判断力・行動力の鍵となると考えている。こうした防災におけるソフトウェア、あるいはヒューマンウェアの形成はどのように推進されるのか、そのために学校教師はどのような役割を果たし、またいかなる力量・資質を備えなければならないか、今後もこうした問いに研究室の全員で真摯に向き合っていきたい。

(自由記述: 3/3)